あってきた関係性が築かれたからこそ，対象地域とディシプリンの境界を越えて，互いの研究が響きあう論集として仕上がったのではないだろうか。温帯社会を，生産至上の社会と論じることそれ自体が，この社会にも確かにあるケアの実践や関係をますます不可視の領域へと追いやるのだとすれば，私たちが次にすべきことのひとつは，熱帯地域と温帯社会を対比して，後者を批判的に見るにとどまらず，温帯社会でこそなおさら「例外」とくくられがちなケアの広がりを正統に評価することのように思える。

2点目は，「生産」から「生存」へという視座の転換と関係している。本書では具体的かつ対面的に築かれるケアや配慮の関係は，個々の「生存」を支えるものとして描かれているが，一方で「ケア労働」とよばれるように，ケアは貨幣価値をもつ「生産」領域のものとしてとらえられ，そして近年では地域や国家を超えてグローバルに流通しているのも事実である。東南アジアの人々が，ケアギバー，すなわち看護・介護労働者として日本などへ出稼ぎに行くことも，ケアを求めて東南アジア諸国に長期滞在・移住する日本人高齢者の数も増えている。熱帯社会の人々のケアのあり方は，医療や福祉の文脈において商品化・産業化が進んでいる。また自然，すなわち生命圏・地球圏に対して築かれるケアの関係性でさえ，市場化される文脈がある。オーストラリア先住民のアボリジニは，自然とのかかわり方を「大地に対するケア」と表現してきたが，オーストラリアという先進産業国にあっては，彼らのそうした行動は失業対策のなかに組み込まれ，賃金が支払われる。今日，アボリジニは自分たちの「大地のケア」が貨幣価値を生むものであることを強く認識している。このように，ケアという概念や言葉，その実践そのものが生産至上のパラダイムへと組み込まれ，そのなかでこそ存続しているという現象をどのように考えるべきか。温帯社会と熱帯社会が急速につながりつつある今日，両者の絡まりあいをさらに丁寧に見ていくことが次に必要とされるのではないだろうか。

このように本書は，さらなる問いを呼び起こし，新たな論点を生み出す刺激的なものとなっている。最後に指摘しておきたいのは，本書を支えているのは，著者らが長期にわたるフィールドワークのなかで培ってきた熱帯社会に対する信頼と敬意，そしてこの世界はきっともっと暮らしやすいところになるはずだという確信であるという点である。それが感じ取れるからこそ，本書は，地球全体の未来を見通した壮大な提案を，しっかりと地に足をつけて論じた好著となっている。

（丸山淳子・津田塾大学学芸学部）

参考文献

西　真如．2012．「熱帯社会におけるケアの実践と生存の質」『生存基盤指数――人間開発指数を超えて』講座　生存基盤論　第5巻，佐藤孝宏；和田泰三；杉原　薫；峯　陽一（編），193–226ページ所収．京都大学学術出版会．

清水　展．『草の根グローバリゼーション――世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』地域研究叢書25．京都大学学術出版会，2013，468p.

まずは6ページに掲げられた一枚の写真に瞠目させられる。本書の主要な登場人物の一人であるキッドラット・タヒミックと著者がはじめて出会った1982年の映画祭でのショットである。あとがきによると本書に結実する現地調査は直接的には1997年から2009年の13年間のべ230日にわたるが（それだけでもかなり息の長い仕事と言えるが），それ以前よりフィリピンをフィールドとした30年来の関係構築と研究蓄積が下支えとなり，結果として著者・清水展にしか著しえないエスノグラフィーとなった。

本書の舞台であるフィリピン・ルソン島北部のイフガオ州フンドゥアン郡ハパオ村は，ユネスコ世界遺産に指定されたことで世界じゅうに知られる棚田の村である。ピヌゴと呼ばれる棚田上方の森林の伐採・枯衰は，土砂崩れや灌漑用水の減少などの原因となるので，植林による環境保全が必要である。植林運動に立ち上がった村出身のロペス・ナウヤックは，グローバル・ステージを意識

した融通無碍な論理をさまざまに繰り出し，グローバリゼーションに対峙かつ便乗していく。その盟友である映像作家のキッドラット・タヒミックは国際的な知名度を背景に，運動のスポークスマン的存在として，この植林運動の情宣活動をグローバルに展開する。そしてその運動に方法論的に「巻き込まれ」た著者自身の活動も，このエスノグラフィーの重要なコンテンツの一部となっている。7年間で8,500万円の助成金を獲得する仲立ちをしたり，日比両国のNGO団体の交流連携を促進したりして実際の活動に深く関与することによって，ハパオ村の植林運動と社会開発に関する出来事を自ら推進していった過程が記述されている。

以上が本書の概略である。表題の「草の根グローバリゼーション」とは，ロペスやキッドラットにとっては活動の実態であるともいえるし，グローバリゼーションのあるべき姿を追究する著者にとっては標榜すべき理念としても提示されている。エスノグラフィーという作品の性格上，目次構成に沿った全体の要約紹介は控え，ここでは本書の叙述から評者が読みとったキーワードを三つとりあげ，それに即して関連する本書の内容に必要に応じてふれるという形式をとりたい。

第一のキーワードは本書表題にもある「グローバリゼーション」である。かつては政治経済的側面を中心に研究がすすめられてきたこの主題に関して，近年では文化人類学領域からのアプローチも顕著である。その全般的傾向を簡潔にまとめた湖中真哉によれば，A・アパデュライの提唱した「草の根グローバリゼーション」は，「地域文化の多様性をつねに配慮してきた人類学者にとってある意味で当然の対応」ではあるが，「ローカルな個別性を対置してグローバリゼーションに抵抗することは，反動的ナショナリズムやパローキアリズムに陥る危険性と裏腹であり，結果的に，グローバリゼーションを強化してしまうことも多い」［湖中 2010: 52］という。

このような指摘に対し，本書最終（10）章では次のような議論が展開される。イフガオにおける棚田の環境保全運動は，私たちの同時代の問題としてつながっている。その論拠のひとつが「宇宙船地球号」という運命共同体の概念である。ところがこの概念の背景には，ハーディンの「コモンズの悲劇」論やメドウズの「成長の限界」論など，先進国による強制・抑制の必要性を説くネオリベラルな包摂的管理の議論が見え隠れする。実態として，フリーアクセスのコモンズはむしろ稀であるし，「宇宙船地球号」にも船室等級の差があるという現実を考えるならば，ミクロでローカルな実態をふまえることが重要であるという批判が生まれる。その点で，自然環境や生命圏に関する議論で用いられる「宇宙船地球号」のイメージは，政治経済文化領域においては，ローカル化と表裏一体に進行するグローバル化，すなわち「グローカリゼーション」にシフトすべきである。また同様に「地球環境共同体」や「グローバル・エコ・イマジナリー」という概念は，むしろ「遠隔地環境主義（イマジナリー）」として鍛え直されなければならない。この鍛え直しの志向するところは，グローバリゼーションをローカルで草の根レベルから再編し，人権や貧困解決，災害援助や環境正義を目的とする「国際市民社会」である。

この方向性はきわめて明快で，その本義はつきつめれば「ローカルなロジックをいかにグローバル社会で通用させるか」という点に集約されよう。身の丈を越えて共感がともなわない「地球環境共同体」よりも，「遠隔地環境主義」（この語はアパデュライの「遠距離憎悪」の裏返しのようにも読める）によってイフガオと丹波篠山の山村が大都市を経由しなくても直結するあり方に可能性が見いだされる。最終章で言及される「国際市民社会」という概念が本書で叙述された活動全体を集約するかどうかは議論もあろうが，その語によって別のスタンダードへ収斂される陥穽をいかにして跳躍するのかが鍵となろう。

第二のキーワードとして，「応答」（著者の造語では，346ページに「responce-bility」と表記されている）というフィールドワークのスタンスを考えたい。このキーワードは前著『噴火のこだま』でとったアプローチを，方法論的に深化させた意図的「巻き込まれ」だともいえる。「応答」の具体的内容としては，草の根のNGO団体のとりなしをはじめとして，トヨタ財団の選考委員としての審査，国際協力機構をはじめとする日本の助成団体から

の活動資金獲得のための申請資料作成やアドバイス，さらには「事前の実行可能性調査や事後の評価調査のチームに団長として参加」(p. 11) するなどである。

これらの関与はある意味では「応答」以上に濃密だともいえ，それは（門外漢の評者には不適格な判断かもしれないが）開発現象のエスノグラフィーとしての臨場感にも結びついている。たとえば，「グローバル」の植林活動への応募が日当を目あてにしたものになってしまい運動理念の高さとのあいだに齟齬を生じさせてしまったことや，自文化の覚醒のためにかかる長い時間に対して援助期間や成果還元までがあまりに短期でギャップがあったこと（pp. 386–389），中心人物のロペスが受けた巨額の活動資金の使途をメンバーや村人に疑われ互いに離れていったこと（p. 392），JICAへの最終報告書で目標に到達できなかったことを事業主自身が結論づけていること（p. 403）など，深く関与しなければわからない事実が身贔屓や手前味噌を超克した視点から叙述されている。応答の人類学が真摯さと誠実さを両輪としなければならないことの範であろう。

このエスノグラフィーに書かれた出来事の大半は，著者の介在なしには生起すらしなかった可能性が高いという点で，手法としては，沢木耕太郎のニュージャーナリズムを彷彿させる。はやくからニュージャーナリズムとエスノグラフィーの近似性を指摘していた沢木は，あるときからインタビューや文献収集といった一般的取材のみによらず，自らが能動的に引き起こした出来事そのものを題材とするルポルタージュを次々と発表していった（『一瞬の夏』や『深夜特急』など）。それは体験というもうひとつの回路を最大限に開放し，その体験こそが作品のコンテンツとなるようなルポルタージュの作法だった。ただし本書の場合，沢木がいうような「シーンの獲得」だけが目的というよりも，文化人類学の金科玉条とされてきた参与観察法（participatory observation）をさらに一歩も二歩も踏み込んで内的経験と理解を目指す方法として提起されている。著者はロペスより，「グローバル」日本支部（p. 70）や活動記録・広報担当（p. 373）といった役回りを与えられるが，それらは，かつてインテンシブ・フィールドワークの標準とされた2年間の住み込み調査でなくとも，遠隔地にあっても可能になった関係の継続を前提として実現できる関与と支援のありかたであるという意味で，まさにグローバル時代の参与観察法といえるかもしれない。

第三に，この作品をきわめてユニークなものにしているエスノグラフィー作法としての「彼我の別なき境地」というキーワードをとりあげたい。これは著者によっては，「彼らと私たちの相似と差異の両面を複眼的に，あるいは合わせ鏡のようにして理解すること」(p. 196) というリフレクシブな自己投影として意識化されている。ただこれを，インフォーマントへの共感というありがちな精神論的スタンスとしてではなく，より深いところで十全に理解するには，著者の「アメリカの磁場のなかの自己形成」という論文が手がかりになると評者は考えている。フィリピンと日本におけるアメリカの歴史的影響を論じたこの論集のなかで，この論文は異色を放っている。それは両国が「心ならずも，しかしアメリカの明確な意図と戦略のもとで親米的心性へと飼いならされてしまった同類，挑発的にいえばアメリカを父とするアジアの異母キョウダイとして捉えなおそうとする企て」[清水 2011: 257] だと述べる以外には，山口百恵と小泉純一郎をとおして著者の郷里である横須賀のアメリカ経験の分析に集中した議論が展開するだけで，ほとんどフィリピンに言及されることのない一風変わったコロニアル・フィリピン論である。

おそらくこのような精神史的原風景をフィリピン研究原論のうちにもった横須賀人である著者は，アメリカ式知的形成の優等生としてサクセス・ストーリーを歩み始めた自己をいったんかなぐり捨て，民族的出自が異なるのにあえてイフガオ「原住民」になろうとするプロセスそのものによって自己再成形を図るキッドラットに出会ったとき，陳腐な言い方ではあるがまさに彼の中に我を見いだしたのではなかろうか。「彼の自覚と企てと私自身のアイデンティティに関する内省と再構築の希求とが深く関係している」(p. 123) ことを詳述する第3章の注（2）などからも，一方的な過剰解釈ではないことが知られよう。

このようなスタンスを作品の核心部分においた本書は，実験民族誌の時代にさかんに指向された一人称民族誌やオートエスノグラフィーとも趣を異にしている。キッドラットのサードワールド・カメラ（この語自体は本書には出てこないが，153～154ページあたりで紹介されている竹製の模造撮影カメラがそれである）を用いたパフォーマンスは，「撮る者と撮られる者，見る者と見られる者，語る者と聞く者との立場を頻繁に取り換え，主客の転倒を意識的におこなう」（pp. 178–179）ことに眼目があった。エスノグラフィー自体もこのサードワールド・カメラのようになることによって，他人事，他所事としての「異なる生活様式」の記述を脱し，時間も空間も異質なセットの中に生きているが，そこで出会う他者のなかに我を見いだしたり，我をとおしてじつは他者を語ったりするプロセスが描かれるものになるかもしれない。そしてその通底部分には，グローバルな現代をともに生きているという現在進行形の感覚があるのだ。本書によって，「私があなたであるかもしれない，あるいは，あなたが私であるかもしれない可能性を問う物語」というエスノグラフィーの新たなステージがひらかれることを予感したのは，評者だけだろうか。

（川田牧人・中京大学現代社会学部）

参照文献

湖中真哉．2010.「序『グローバリゼーション』を人類学的に乗り越えるために」『文化人類学』75(1): 48–59.

清水　展．2011.「アメリカの磁場のなかの自己形成――山口百恵と小泉元首相をとおしてみるヨコスカと戦後日本のねじれ」『アメリカの影のもとで――日本とフィリピン』藤原帰一；永野善子（編），255–291ページ所収．法政大学出版局.

日下　渉.『反市民の政治学――フィリピンの民主主義と道徳』法政大学出版局，2013, 442p.

本書の内容

アジアにおける中間層の台頭は民主主義を促進するのか。これは，過去10年以上にわたって議論されてきた東南アジア政治研究の大きなテーマの一つである。中間層の成長が著しいはずのフィリピンやタイで，「民主主義」を標榜する知識人やNGOが一定割合に上るなかで，選挙結果に納得しない人々が路上に出て超法規的な政権交代を求めるのはなぜか。

本書は，従来は中間層と貧困層との間の経済格差に起因する利害対立の結果として説明されることが多かったフィリピン民主主義の不安定の要因を，「政治の道徳化」から説明する。

利益の政治と道徳の政治の最大の相違は，対立が調停可能かどうかにある。先進諸国の福祉国家であれば，貧困層は福祉制度によってある程度の生存の保障を得ることができ，対立は緩和される。しかしそれが十分でない国家では，中間層と貧困層の善悪の価値観が真っ向から衝突することがある。貧困層にとっては，貧困層に共感し目を配るエストラダは，たとえ汚職をしていようとも「よいリーダー」であり，露天商やスラムを排除して近代統治を目指す政治家は「悪」であり「敵」ですらある。他方で中間層にとっては，ばらまきを助長するポピュリスト政治家を支持する貧困層は社会改革を阻む「癌」である。2001年にみられた中間層らによる反エストラダの路上集会とエストラダ派の路上集会の対立，マニラ首都圏で日常的にみられる露天商の取り締まりや不法占拠地区の強制撤去などは，両者の道徳的対立の先鋭化により生じたものであると著者は指摘している。

道徳の政治は，国民の分断だけでなく，ときには連帯にも寄与する。階層を超えていまでも多くの人々に記憶されている1986年の「ピープル・パワー革命」や2010年選挙におけるアキノ大統領の圧勝は，中間層と貧困層が，マルコスやアロヨといった腐敗にまみれた絶対悪である「共通の敵」に対し，同床異夢のもとに連帯した結果である。